



伝小堀遠州筆 臺子八段飴之次第

著者	宮武 慶之
雑誌名	文化情報学
巻	6
号	1
ページ	83-77
発行年	2011-03-10
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013116

資料紹介

伝小堀遠州筆 臺子八段飭之次第

宮 武 慶 之

江戸時代初期に活躍した小堀遠州は、その才を茶の湯だけでなく、建築・作庭にも発揮し、江戸幕府の作事奉行として活躍した人物である。遠州は、古田織部に茶を学んだ。その織部は千利休に学び、台子の許しを得て利休七哲に数えられている。本書は台子点前の伝書であるが、云わば、利休の流れを汲む台子の伝書であるといえる。

本稿は、竹幽文庫所蔵の「伝小堀遠州 臺子八段飭之次第」を翻刻したものである。

《解題》

本書の題にもあるように、台子とは茶の湯において飾りを行う四本柱の棚物のことである。これは、一説によれば、大応国師(南浦紹明)が師である径山・虚堂智愚師のもとを去り、帰朝後に博多崇福寺に持ち帰ったと伝えられる棚で、以降、現在に至るまで茶の湯の中で、格式の高い棚物の道具としての扱いを受けている。時折、寺社仏閣での家元奉仕による献茶で用いられるのもこの棚である。

この台子の飾りに関して、その原型は「君台観左右帳記」内に、風炉釜・水指・杓立等が違い棚の下に置かれた図があり、その配置に求めることが出来ると考えられる。足利時代以降に、台子の飾りとして八つの

飾りが決められた。飾りの内容に関しては、本翻刻内に譲る事とするが、名物道具使用の場合等、その飾り方には細かな伝があったことが分かった。その飾り方の伝書を小堀遠州により書かれたとされるのが本書である。

なお台子に関しての先行研究としては神津朝夫「台子点前の秘伝化」(茶道学大系)、また、小堀宗慶による「小堀家台子点前伝書」の解説などが挙げられる。これらで用いられる台子伝書の点前は、千利休によって改められた台子の点前がその中心である。特に、遠州筆とされる台子の伝書および写本は幾つか散見する事が出来る。この背景には、免状としての「許し」による流儀内での複写を許可したものと思われ、依然として、台子の点前が最も格式の高い点前であることを物語っているように思われる。

台子の伝書として他には、東京大学所蔵、慶應義塾大学所蔵、東京国立博物館所蔵、国会図書館所蔵等多くが挙げられ、その内容も八段の飾方を示しており、各本共、前文における台子の紹介に若干の差が見られる程度である。

台子研究の周辺については、そこに用いられる道具（水指・杓立・建水ほか）の起源についてもはつきりとした論拠を示すことが出来ていないのが現状である。本書にある飾りの変化を言い換えるなら、道具の格による扱いの変化ともとれるが、内容についての詳しい検討は後考を待ちたい。

《凡例》

一、底本は、卷子一卷。表紙の表は、八葉紋緞子、裏は雲母引きの紙料である。なお見返しには裏と同じく、雲母地に柴垣の絵が描かれている。一紙あたりの大きさは、横四十五センチ、高さ三十センチ。これらの紙を二十三枚継いであり、全長で約十メートルである。紙質は美濃紙薄手のものを用いており、墨色は濃淡があり、いわゆる遠州調の筆跡で書かれている。これらの筆跡から察するに、寛永以降の光悦風の箇所も見受けられる。従って、写本であると考えられる。収められている箱は、材が杉で幕末から明治にかけて作られたものである。貼り紙が二枚あり、一枚は、蔵番が書かれたもので、そこには「遠州公筆 抹茶ノ梨 二箱之内」とあり、元来は二対の内であったことが分かる。もう一枚は、入札時の整理番号札（九二三）と思しいものが貼られている。

二、各条一つ書となっており、便宜のため、「二」の形をとった。また、各条に1、2、3……の通し番号を付した。
三、底本は、漢字・平仮名・片仮名混じり文である。漢字は通行字体を用いて翻刻した。振り仮名、濁点は底本にあるものをそのまま記した。適宜、句読点を付した。

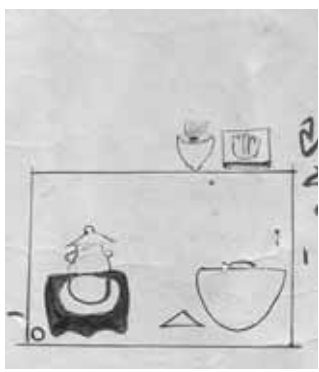
四、底本中の図は該当箇所の冒頭に（e数字）として挿入した。

《本文翻刻》

墓子八段の饒之次第



- (e1)
- 1一、これを真の七饒といふ也。此風炉をなつめ風炉といふ。上は二つ組といふ也。
 - 2一、四組の時は蓋置、風炉の方二置也。
 - 3一、これを立るやうは右あかりならば、水建を左にをき、左あかりならば右のかたへおろし蓋置を水建の跡にく也。



- (e2)
- 4一、これを略の三饒といふ。此時始めて珠光、蓋置にかくれかを思ひ合テことくを仕始仕始られ候也。

5一、水さしハ半胴といふ金にても、土にても也。上の組合のことし。

茶入はかたつき也。

6 一、此手前は水建に柄杓のせて持て出、いつもの所におき、先茶碗おろし、其次に盆ながら諸手ニて茶入おろし、いつもの所をき茶立る也。ことくハ其儘をき柄杓をのせ、えをハ風炉の前へ一文字にをく。三角ハ茶立時の茶の巾置所也。

7 一、此風炉ハきりかきとも、かき風炉共云。前のはみな、なつめ風炉といふ也。

8 一、さて、ひさまつき盆ながら下へおろし、先かりに其あかりのかたへ遠のけて置、我身ヲ座の所へ盆をよせ天目釜の蓋を取て柄杓をとる也。柄杓取テ釜の蓋を取方なかれ、さて湯を汲入茶立方の次第、如常、尤茶釜入持参すへし。

9 一、水指の蓋を取テ置所は角の柱の下にもたせ、上を水指によせかくる方、本の式法也。

10 一、蓋置をなをすに蟹は頭を前へ、三足のものハあし一つ前へさし、ひハしりを水さしの方へなす。青仰ハひを前へ何も如此なをすもの也。

11 一、火箸ハ初ハ饅、炭置て其次に炭斗にそへ勝手へ入後の時にハなし。

12 一、柄杓も中立の間にぬらし臺子へ雫の落ぬやうにす。

13 一、柄杓立に箸ハかならず水指のかたにをく式法也。柄杓ハ少かたふけてをく方あり。秘方也。

14 一、柄杓ハ風炉と水建との間の方へからをなす物也。初の度の方、後にハ正面にならて置物也。

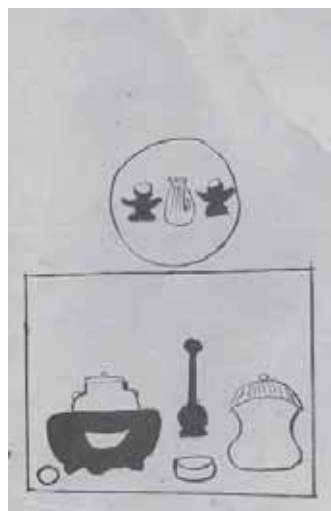
15 一、茶立終時、柄杓立へさしてから釜の蓋をする物也。又立様にも釜の蓋を取てから柄杓をとる物也。

16 一、柄杓立につき茶立様終ニ大方のあひしらひあり。猶、以修行すへき歟。

17 一、柄杓取さまにも置さまにも右の袖を左の手にて少からへて取をきする物也。益テ長袖には猶する方也。

18 一、これも七つ饅也。水指ハ玉興といふたきつほ也。

19 一、これハ貴人ニ御座候時にか様に組合有也。此盆を二つ入の盆といふ也。



(e 3)

20 一、釜ハ車軸也。式賞の釜ハ一に真の釜、二番に丸釜、三番に車軸、四にひら釜也。

か様に釜に次第ある方ハ何故なれハたいすの茶湯に替り釜により道具の置所かハるゆへ也。

21 一、此手前ハ貴高二人といへとも其内の其内（ウチノウチ）の上座へ可を天目を先へおろし今一ハ其次ニおろし次より替盆といふ物を取出し茶入をのせ茶立る也。

22 一、此手前に付て大方の習ひあり。天目を本より臺（たい）から一つおろして前にをき、今一の天目ハ少脇へ先かりにをき、さて茶入おろして初に茶入盆の仕舞して釜の蓋を取、ふたおきにをき、さて、今一つかりに置たる天目を二つろくになをし柄杓をとりたつる也。是秘方也。

23 一、天目すゝき申ニ大方あり。一番すゝきには柄杓に湯たふくと、

くみ二の茶碗へ等分にいれすゝきて、二番すゝきの時は能比に湯をくみめむゝにいれ、一の天目を少脇へよせて釜のふたはしめ、天目を本の座になをして立る也。

但又

天目へ茶筌入候て別のには不苦同位の御前なれば臺をふき茶を入一度に立て出す。兩人高位成といへとも、先後あり。其時は今一つの天目の湯をすてすしてをき、先一つ立て出し、其後今一つの天目の湯を捨すして下へおろし、臺を



ふきて湯をすて立る也。相しまふ時は二度すゝきて上座の天目すゝきふきて上へあけて置、今一つ天目をすゝきしまひて茶入みせよと被仰候とき前に申こたくいたし見せ申候。釜へ水をと

さし萬の仕舞過て前へにある天目を持って入申候。初天目をあくる時は。(後欠力)

(e4)

24一、子細に不及。火箸と蓋置と二色のけて五飭といふ。上の組合は前のに茶筌茶杓を添たるものなり。これを五組といふ。

25一、此手前は前のことく天目二つ下へおろし茶筌を風炉と柱との間頭に蓋をき置所にをき申余は。(欠力)

26一、蓋をきは後に持て出、水こほしを下へおろして其跡にをく也。茶巾をハ茶筌入にいれて出る方もあり。二つの内二番の天目へ入テ取方あり。

盆の真中へをき取て入様ニはひさまつき、盆なから下へおろし、盥にをき、さて立なおり、つくはいて取勝手へ入。又初の天目を持てのき其かへりに水継を持て出、水さしへさし、水つきを勝手へ納めふくき二て臺子を拭ひ、しめりたる盥などはなかみ二て拭などとして、さて右のことくにおろしとり退く也。但水建蓋をきは天目を初持て入たる帰りて候。其かへりに今の仕舞也。

27一、これも五飭也。柄杓あり。

28一、上をは四組といふ也。

(e5)

29一、盆をは四組の盆といふ也。

30一、此手前は天目二つなき斗、茶筌茶杓にあいしらいあり。

(e6)

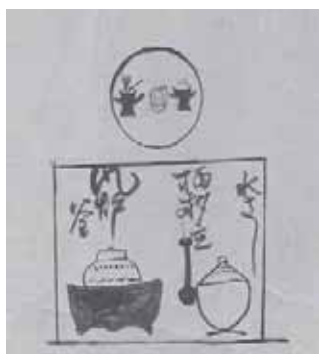
31一、これは四つかさりといふ。柄杓有。

32一、上は三組といふ也。茶入と天目と茶筌入と三角に組合也。茶入名物ならず勝たるなどあらは如斯也。

33一、蓋おき水建無名のものなれば飭さる也。

34一、此手前は引切か又ハ出のりの式釜の無名のものなれば、水建の中へ入て出、水こほし置へき所に先置、半の蓋をき、両手にて天目を

扱



但入様にハ、先天目次に茶筌入、次に蓋置と水建と一度に持て退也。本より茶入は客に見せて其内の仕舞也。

35一、此手前の時、貴客ならば天目上へあけて茶入は客の方へ出す。盆名物なれば、盆ともに出す。盆大きなるか又、無名の物ならば茶入ばかり出し、盆勝手へ入方もあり。又、盆をふき上へあけ真中に天目をきて亭主勝手へ入時は一番に茶筌入、二番にふたをき、水こほし也。客原ならば盆をふき候時、客よりうすちやの時宜尤あるへき也。



36一、これも五饒也。蓋置名物にて水建無名なれば如此候

(e7)

37一、上をハひとつをきといふ也。縦、風炉釜一つの内のことし。天目も臺も名物にても一組也。此内勝たるありても一組の内也。

38一、此盆は本よりひとつ入の盆といふ也。

39一、此手前ハ先、茶入と茶筌入と持て出、茶筌入をいつれの勝手手にても、又をき合ある事也。茶入少勝ものならば分別可有事也。

但、天井の上盆の外に先かりにをき水建持出、其座に置。扱両手、天井よりおろし次に盆をおろしふくさにてふき、上なる茶入をもろ手にてとり盆の真中にをく也。扱湯をくみ、天目をあたゝめ茶筌入テ天目を下へおろし、臺をふき、茶入の袋ぬかする也。是は盆より茶入勝たるとき也。茶入より盆勝たるときハ、上より下へおろしたる次に、袋ぬかせて盆におく也。余は同前。

40一、これを三饒といふ。柄杓立、水建無名なればかくのことし。され共、蓋置は、右の二種より少勝たるかなれば也。

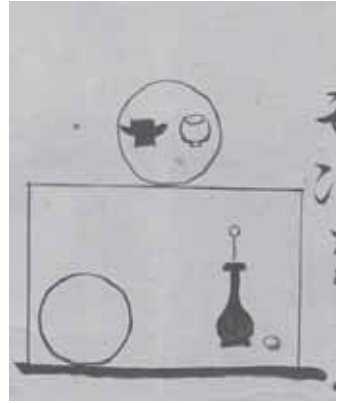


44一、此手前ハ天目臺ともに、柄杓立と同前なる。右饒らす亭主座敷へ出様に一番に柄杓立を右に持、水建に柄杓をのせ、一度に持て出、水建其置所の邊先かりにをき、左の手を柄杓立の蕪にかけ、諸手にて能所二なをし柄杓細口へさす方もあり。此時大方の心持あり。

但、水建能所二なをす其次、天目を諸手にて持出何もの所にをき、さて、盆を下へおろし、能所二をき、扱、蓋置を本座へなをし、次に茶杓をかりに臺に置、茶入を盆よりおろし盆をふき、茶入の袋ぬき盆へなをし、其次、茶杓のこひ盆におく。扱柄杓をとりなをし、左二てもちテ釜のふたを取テ湯を天目へ汲入ふたをしめ、其時より、柄杓立へさす也。茶筌入は、初の天目の時に持て、其時より又茶入と盆との勝劣によつてあひしらひ替方ハ口にも有也。

46一、此手前の一説ニハ、天目へ湯を汲入、先細口へ柄杓をさして後、釜の蓋をしむるともいへり。余ハ前と同前。立終テ細口ハ其儘をき申也。

47一、これは草の三饒也。柄杓立其次、蓋をき水指無名の物なれば如此。



(e 9)

48 一、上は前の盆の無名と同也。

49 一、天目か墓か何れかたゞの朋たる時、如此。又、兩名物にてと也。

50 一、之を飾時は、風炉と細口と、其間能比に置合、蓋をきと細口

の間、柱の間との真中にをく。秘方也。蓋置ありとて、細口と風炉の間如何。細口を能比にをき餘て真中に蓋をくか秘習也。

51 一、此手前ハ、一番に水指持て出、細口の通り畳の上にをき、柄杓ぬき天井へ上、細口をまへに書たることくになをし、柄杓さし蓋をき風炉の邊へのは水指を能所にをき、さて、蓋置を本座へなをし又、一説にハ水指蓋置よくおきすまして、のきさまに柄杓をさすとも、其次に右茶入、左に水建持て水建先かりに置。茶入ニ盆ニ置、扱、盆なから下へおろして墓を先取前にをき、其次に諸手ニて天目をのする也。一説にハ先、墓をかりにおろしをき、もろ手にて天目を盆の真中へなをし、扱、盆なからおろし足先墓をふきて天目をのせ、あたゝむるうちに、盆をふき茶入の袋ぬかせ置ともいふ。是ハ天目勝て、墓劣たる時の事也。もし天目劣、墓勝たると茶入と盆との勝劣、前に書きたるにて習ふへし。茶筌入の事も分也。しきしやうに茶筌、不出といふ事なし。

右墓子、上ハ段の分畢初三段を上の上とす。中二段を上の中とす。後の三段を上の下とす。此段のかさり、七つの内火はし柄杓二種のけて残る六色名物そろへは尤上の上也。此次とハ是にて心得へし。

52 一、これよりして、中八段は珠光と能阿と寄合右の八段数多して六十

敷殊故道具たらひて持方成かたしとて天目を茶椀にくすしてより中後合テ、十六段出来す。其内此中八段はかり又囲炉初りて下八段又出来す。是ハ中八段のくつし也。

53 一、此段の数にハ火箸を必染て六饒を上とし、其上を道具の勝劣にまかせて飾る也。道具の勝劣を吟味するとて、高直のものといふにもあらず、八段侘などのならざる由へに、今仕始められし。召出のものにても面白き道具の方也。尤一種成共、名物あらはと云方也。

54 一、座敷の理、左右の勝手のあかりのなとハ前と同じ。前をつくしたる此段なりとて、天目、盆なきにあらず。又茶筌入の方ありてもなくてもくるしからず。



(e 10)

55 一、これは中の上の饒云也。風炉・釜、別儀なし。水指はしからきニても又、備前ニても南蛮ものニても土のもの也。但かならず土のものを是より下迄用にあらず。一種成共あらは一段の方也。

56 一、柄杓立青磁か、高麗のさゝ耳か。金のものならば南蛮の串つゝか也。水建は瓶の蓋、藤のみ又かね也。

57 一、これは三つ饒也。蓋置名物也。水指の方前と同じ。柄杓立一向のあらものなとならは也。水建同前。

58 一、盆は本より一つ置、茶入勝たる也。

59 一、此手前は茶椀なれば三色の茶具。一々見て持て出る也。是に次第



あり。

(e11)

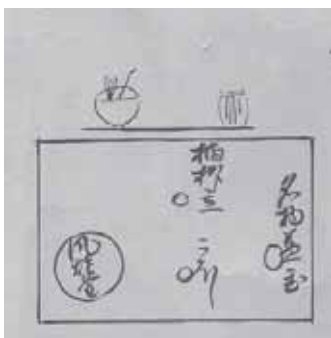
60一、此手前の習ひは上水、茶碗名物にてあらされは、勝たる八天井の上、盆の脇に持て出る也。二番に天目か茶碗也。前の七饒如のことし。但、茶筌入なきは

かりの替如、又茶杓なき斗也。

61一、茶碗あたらしきものならば下におくへし。右丸盆の分すむ。是より方盆・長盆の分也。

62一、これ四つかさりといふ也。

一、上は二つ入の長盆也。肩衝は必、方盆にのする方式目也。二つ置時は長盆。壹置時方盆也。茶入・茶碗共に名物なれば、如斯茶入斗すくれは勿論方盆也。



(e12)

63一、これに天目組合する時も此心持也。

64一、此手前に一番に水指持て出て、かりに疊におき、右にてふた置を取、天井の上、方盆の脇にをき、水指能比になをし、水建を下へおろし、跡に蓋をき置、壮年の人ならば、二種なからおろし、老者又ハ病後などならハ茶碗おろし、次に茶入を真中へなをし、

て、おろす余ハ別義なし。

65一、これも、略の三かさり也。水指高麗名多ふこといふ。



(e13)

66一、此饒は能阿の作分と云傳ふ。ふたをきは青磁の聚仙香立也。

67一、上の茶入はなつめ也。むかしは数奇の身、上に上中下の三段を分、下の茶湯者には、なつめに袋、餘小壺あひしらひさせし也。

68一、此手前は水建に柄杓のせ持出いつれもの所にをき、蓋をき少前へ出し、釜のふた臺子の外へ出ぬやうに心持して柄杓をのせてをく也。但さきは水指の前へなす。茶は三角の所にをく也。